

# 淫乳聖女

## 淫獄の狂虐黙示録

……人生は、一寸先は闇だという。しかし、いったい誰が想像していたであろうか。いわゆる「最後の審判」によって、一切合切全ての人々が、神によって聖別されることになろうとは。

聖別によって、清き心を持ち、正しき行動を心掛けてきた者たちは、「聖刻」を身体に刻まれた後、神によって創り出された「楽園」への移住が許可された。そこは聖域の結界に守られた幸福に満ちた場所であり、人々はそこで老いや病、悩み、そして死の恐怖から解放されて、新たな一步を踏み出した。新聖紀の幕開けである。

その一方で、神に選ばれなかった者たちの運命は悲惨を極めた。聖別の後、彼らは聖域の外にある「追放の地」と呼ばれる暗黒の大地へと破棄された。そこはこの世のあらゆる苦悶や苦痛を孕んだ恐怖と狂気に満ち満ちた場所であり、生と死とが混じりあった混沌の世界であった。

そこに追放された者たちの運命は想像を絶する。彼らは肉と肉を互いに絡ませ合い、混じり合わせながら悶絶し、辛うじて人の形を保った状態で苦悶し続けなければならなかった。肉が裂け、血が迸り、骨が砕け、臓物が弾け飛び、脂肪や皮膚がドロドロに溶け腐り、脳を掻き毟られ、その他ありとあらゆる恐ろしい事象による責め苦を受





しかし、誰が想像していたであろうか。最後の審判なるモノが本当にあると。聖別なる仕分けがおこなわれると。

「いまさら悔い改めても、もう遅い」

樂園に暮らす住人たちは、暗黒の大地で悶え苦しむかつての同胞たちに向かつて、冷酷にそう言ってはばからなかった。

かくして暗黒の大地に追放された人々は、永劫に等しい時間を、ひたすら苦しみながら過ごさなければならなかった。

苦しんで、苦しんで、ただひたすら苦しんで、苦しみをぬいて、自分たちがなぜこれほど苦しんでいるのか、なぜこれほど苦しまなければならぬのか、その理由さえ理解できなくなってもなお永劫に等しい時間を苦しみ続けた。

その間、樂園は幸せのうちに統治されていた。そこに苦しみはなく、差別も、偏見も、区別も、格差も、争いもなく、人々は心穏やかに毎日を過ごし、悠久に等しい時間を幸福に包まれて暮らした。

彼らはかつて人間だった。いまもそうだ。にも関わらず、これほど永い間、人の世の諸悪の根源たる「悪」に蝕まれずにこれた理由は、樂園の住人たち全員に刻まれた「聖刻」の力があつたからであつた。

聖刻は、刻まれた人間の精神と肉体を完全な状態で保つ効果がある。ゆえに、どんなに酷い傷を負つたとしても、致死性の病に侵されたとしても、あるいは精神に深い傷を負つたとしても、傷を負えばすぐに効果を発揮して、傷ついた人間を癒すのである。聖刻の力はそれだけではない。聖刻には「邪心の浄化」という作用があつて、人間の心から尽きない湯水のごとく湧き出る「悪しき心」を体外へと排出する効力もあるのだつた。これにより、樂園で暮らす住人たちは、いつまでも清らかな心を保つことができるのだつた。

かくして樂園での生活は幸福に満ちたものとなり、そこへの移住

が許された人々は、人類史において、どんな為政者も、聖人も、誰も経験したことがないような穏やかな刻を過ごすのだった。

さて、ここからが本題である。

楽園で暮らす住人たちから排出された「悪しき心」は、いったい何処へ向かうのか。それは、聖域の外にある暗黒の大地であった。もはや自分たちがなぜ苦しんでいるのかも理解できぬ肉どもが蠢くその場所に、楽園より排出された「悪しき心」は流れ込んだのである。ほんの少しづつであったが、毎日、毎日、ずっと、ずっと……。

その結果、驚くべき化学反応が発生した。数十臆に及ぶ人間が混ざり合い、思念の濁流となって蠢く肉どもが、ほんのわずかながらも外部から刺激を受け続けた結果、突如として、まるで覚醒でもするかのように敏感に反応して、肉全体を大きく脈動させはじめたのである。

どぐん……どぐん……どぐん、どぐん、どぐん……。それは、心臓が鼓動を打つ有り様に似ていた。そして脳の神経回路に微弱な電流が流れた有り様にも酷似していた。

数十臆に及ぶ「個」が接続された瞬間であった。

いまもなお受け続けている苦しみから逃れるため、乗り越えるため、そして受け入れて我がモノとするため、彼らは個を完全に捨て去って融合し、巨大な「一個」の生命体として生まれ変わることを選択したのだった。

「あ、ア、あああ、アア……。」

醜悪なる肉の塊から漏れたその音律が、狂気に満ちた産声だった。それは解放であり、超越であり、そして転生であった。かつて人間であった彼らが、想像を絶する苦しみの果てに、人間以外の「ナニカ」に生まれ変わることができた理由は、もはや奇跡以外の何モノでもなかった。

奇跡を可能にしたモノは、流入する「悪しき心」にほんのわずかに混ざっていた「神聖成分」であった。それは神の力の片鱗であって、それを吸収することにより、暗黒大地に蠢く「肉塊」は、神の力を得ると同時に、楽園で暮らす住人たちですら気づかなかった神の真意を知ったのであった。

それを知って「肉塊」は嗤った。

「あハ、はハハハ……そ、ソソ、ソウか、ソウか……神ハ、もウ、この世界ニは、興味がナイのかアア……」

これほど滑稽なことは他にないであろう。神の庇護を受け、護られていると思って疑わない楽園の住人たちも、まさか自分たちがすでに神に見捨てられているとは想像すらしていないに違いない。壮大な茶番劇だと思って、自我を持った「肉塊」は笑った。笑い続けた。

それから、彼は静かに刻を過ごした。苦しみは、もはやない。ゆえに、永劫に等しい時間を、彼は思考して過ごすことができたのだ。その間も楽園からの「悪しき心」の流入は続いていた。それによって、「肉塊」は、楽園に暮らす住人たちが、幸せでありながらも、どこか満たされないでいるのを感じとっていた。

彼らも所詮は人間なのだ。聖刻の効果によって清浄な心を保っているとはいえ、悩みもすれば怒りもするし、嫉妬もするし、苦悩もある。ただただ、聖刻の効果によって、清き心が保たれているだけなのであった。

ゆえに「肉塊」は悟った。神の真意に気づいた自分こそが、楽園に暮らす住人たちに、新たなる福音を授けるにふさわしい存在であるのだ。彼らに「苦しみ」を与えることこそが、自分の使命なのだと思考したのであった。

「ワ、わわ、わわワ……あ、ア、あー……我

ハ、「不浄ナル存在」。全ニシテ一、一ニシテ全。無知蒙昧ナ羊ドモニ  
「苦しみ」ノ福音ヲ授ケ、魂ノ牢獄カラ解放する存在。楽園ヲ、破壊  
セシモノ……………」

流入する「悪しき心」から得た情報によって、自らを「不浄なる存在」と自称するようになった自我を持った「肉塊」は、楽園を解放するための策を考えた。

楽園は、聖域の結界によって護られており、それを破ることは決して容易いことではない。体内に溜まっている神聖成分を集めれば、身体の一部を聖域内へと送り込むことは可能であるが、楽園にまんべんなく福音を授けることは不可能である。

「結界ヲ破ル必要ガアル……………シカシ、ドウヤツテ……………？」

悩みはしたが、解はすぐに出た。

「アア、ソウカ、ソウカ……………産マセレバヨイノダ。聖ト邪ヲ融合サセタ存在ヲ……………我が分身体ヲ……………」

それはまさしく悪魔的な発想であった。

楽園で暮らす住人を拉致し、「苦しみ」の福音を授けたうえで、境界を破る先兵を生産する苗床として活用する。問題は、どのような者にその役割を負わせるかであったが、いまだ流入が続いている「悪しき心」がヒントをもたらしてくれた。

楽園には、神の代理人たる「聖女」がいるという。美しく、聡明で、強く清らかな心と、母性の象徴のような豊満な肉体の持ち主で、楽園で暮らす全住人たちの心の支えのような存在なのだそうだ。その「聖女」は楽園で暮らす住人たちのなかでも特に多くの神聖成分をその肉体に宿していると思われるが、しかし、所詮、元はただの人間である。ゆえに、聖刻の効果によって清らかな心を保っているとはいえず、悩みもすれば、困りもする。それも、決して人に相談できないような

苦悩を抱えているのである。付け入る隙は充分あるように思われた。

「決メタ。コノ聖女ニ、マズハ我が福音ヲ授ケヨウ。ソシテ、我が分  
身体ヲ孕ミ産ム苗床トスルノダ……」

……数日後、楽園に激震が走った。

聖女エレアが突如として姿を消したのだ。住人たちは必死になっ  
て探したが、彼女は何処にもいなかった。

「もしかして、神に召されたのではないだろうか……」

誰かがそう言ったことにより、誰もがそうだと結論付けた。まさか  
暗黒の大地に追放された者たちが、一個の生命体としての統一を果  
たし、楽園の破壊と征服を狙っているなどは、彼らは夢にも思わな  
かった。

かくして、楽園の住人たちは、聖女が消えたことを悲しく思った  
が、聖刻の効果によって不安の心が浄化された結果、誰もこの一件を  
深く追求しようとしなかったのであった。

……続きは本編でお愉しみください。